

---

# エイプリル・デイズ

なず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エイプリル・デイズ

### 【Nコード】

N9109X

### 【作者名】

なず

### 【あらすじ】

終わらない日々を、生きることしかできない少年の話。

**（前書き）**

短編第二段です。

スランプです……ま、負けない！  
↑

知らないことはありません。  
知りたいことはありません。  
ただただ、終演を。

午前六時三十分二十一秒。  
起床。

「ふああ……」

欠伸のあとに、鳴り響く目覚まし時計を手取る。安っぽいデジ  
タル時計。

左上にチカチカと点滅する、四月一日。嘘の日。

そして僕は、また落胆する。

「まだ……終わらないのか」

これが僕の朝の風景。

これが僕の――

二万八千回目の、四月一日。

事の起こりは、一回目の四月一日。

入学早々にホームルームをサボった僕は、持ち前の強運で教師陣  
をまいて上機嫌だった。揚々と、商店街をうろついていた。

が、そんな僕に

「やあこんにちは。死んでくれない？」

と、そいつは軽く言ってみせた。

開口一番に物騒な。

「断るね」

関わらない方がいいと即決した僕が返すと、そいつは困ったように笑った。

いま思えば、それは困った笑顔ではなかったのだ。面白いと笑っていた。

面白すぎて困るという笑顔だったんだ。

気付いていなかった僕だが、一応警戒はしていた。  
だって春だし。

「まあ、普通そうだよな。あ、オレこういう者でーす」

「……ご丁寧にどうも……？」

「疑問形かよ」

熟練したサラリーマンの如き流れ（口調は社会人としては失格だろうが）で名刺を渡され、思わず受けとる。

……意外と律儀だった。

名刺に目を落とすと、流暢な毛筆。まれに見る達筆に感心したのも束の間。

『エルライトⅡヤルフエル

職業：死神』

ぴしりと音がしただろう。そのくらい目に見えて、僕は固まった。  
ああはい、予想はしていました。ぽかぽか陽気で頭も春ってやつですね。

「死神でーす」

語尾に星がつきそうな調子で、緩く敬礼する自称死神。

そいつと名刺を二、三回交互にみてから、僕は名刺を破り捨てた。それからちよつと考えて、地面に散らばった紙クズ（細かくしすぎたので数が多い）を拾い集めて、近くのコンビニに捨てた。ポイ捨てはよくない。

コンビニから戻ると、自称死神——エルライトは苦笑していた。「それ受けとつてオレの目の前で破り捨てたの、アンタが初めてだぜ」

「そりゃ光荣」

他の人にもしたのか。よく通報されなかったな。

「用はそれだけなら、僕はこれで」

そそくさとエルライトの横を通り抜ける。

抜けようとした。

黒く鈍く、鋭く輝く、紛れもない武器が。

僕を捉えていた。

「逃げないでくれよ、まだ用はあるんだ。……もつとも、いま動いたら、アンタの首が吹っ飛ぶだろうがな」

正確には僕の首——頸動脈を斬り裂く寸前で、武器は静止していた。

鎌が、静止していた。

僕を捉えている武器を理解した途端、足元から沸き上がる恐怖とパニック。

赤い。赤黒い。純粹な黒じゃない、赤が入り混じった黒。

ぷんと香る、鉄錆のにおい。

なんだあれ。なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだあれ、なんだ——いや、気付くな、考えるな。

けれど僕は気付いてしまう。

あれは、あの赤黒いのは——血だ。

ひゅっ。僕の喉が情けない声をあげる。  
殺してる。

こいつ、人を、いや人じゃないかもしれない、だけど生き物を、  
この鎌で、殺してる。

次は、僕を。

「――ふ、」

ため息を吐き出す。

僕は、パニックだった。

パニック、だった（・・・）んだ。

そう思え、思い込め。

落ち着け、落ち着け……落ち着きやがれ。

「なんの、つもりだ」

よし。

少しは冷静に、平静を装えたはずだ。

「殺すつもり」

にやりとエルライトが笑みを深くしたことに気付くくらい――それ  
に苛立つくらいにまで、冷静になれたようだ。

「なんで」

「そう決まったから」

「……ふん」

「……ふっはは」

淡々とした会話のあと、エルライトは鎌を構えたまま肩をゆらし  
て笑った。

我慢ならねえと笑った。

「面白いなあアンタ！ 死神つつうのは信じてねえんだろうけど、  
鎌つきつけられて一瞬しかビビらねえとか！」

「僕は運がいいからね」

数センチ先で、カチャカチャと揺れる鎌を気にしつつ言えば、死  
神は口が裂けるんじゃないかと思うくらいに大口を開いて、また笑

った。

「”運がいいから”！　ほおん！　だから死なねえとタ力をくくつてゐるわけかい」

ぶつり。

皮膚に鉄が割り込む音がした。

「うん、確定だわ」

つつ、と一筋流れる血。

鎌との距離、マイナス。

「アンタ、オレが大ッツツ嫌いな種類のイキモノだ」

だから死ね。

エルライトが鎌を、降った。

最初に青空が広がっていた。

次にふかふかの布団の存在と、自分が生きていることに気付いて慌てて起き上がった。

その次に

「よう。起きたかくばあ!？」

当たり前のように椅子に座っていたエルライトを全力で殴った。的確に鳩尾をねらって殴った。

「くっ、やるな青年」

「黙れ事情を説明しやがれ」

「超矛盾」

「次は鼻だ」

「ごめんなさい話します」

さて、ふざけるのも此処までにして。

僕はエルライトの話を聞くことにした。

「まず言つと、アンタは死んでない」

「なんでだ」

「アンタの持ち前の”強運”だよ。”悪運”とも言えるな」

「悪運……」

あの状況からどうやって助かったのか分からないが、死んでいないのは確かだ。

喜ぶべきなんだろう。

「けど」

エルライトはスツと表情を消して言う。

「生きてもない」

「……は？」

死んでないけど生きてもない？

「どういう事だ」

「落ち着け、話すからよ」

「……」

なんなんだよ。

僕になにが起こってるんだよ。

そんな気持ちを知ってか知らずか、エルライトはポン（・・・）と手品のように鎌を出した。

僕を斬り裂いたはずの、赤黒い鎌。

「これはオレの仕事用具。オレは本当に死神だ。オーケー？」

……ここまできたら、信じるしかない。

僕はただ、頷いた。

エルライトも、頷いた。

「で、この鎌はお分かりの通り、魂を狩る。さて問題。魂は何で成立しているでしょう？」

首を横に振る。「まあ分かんねえよな」とエルライトは苦笑した。「魂つてのは”記憶”と”運”で出来てる。そのふたつによって、魂の価値が変わるんだ。」

普通より記憶力がいいやつはその分の価値があるだけだ」

だがしかし。

エルライトは区切って、僕を指差した。

「運がいいやつは違う。レベルが違う」

「……？」

「幸運、不運、悪運、金運、恋愛運。運っていつでも色んな”運”がある。」

”運”それぞれに格付けされていて、その中で一番価値があるのがアンタが持っている、幸運だ」

という事は、僕の魂は最上レベルな訳だ。

こくりと頷いてみせると、「その上」とエルライトは続けた。

「アンタの幸運は、異常なほど価値がある」

「どのくらい」

「無自覚で神のオレと渡り合えるくらい」

「はあ!？」

神と。そりゃ異常だ! というかエルライトも神だったのか？

確かに死神だから、神ではあるか……。

……じゃなくて。いや、それもあるけど。

——無自覚？

「おい、もしかして僕が生きているのって」

「ああ。無自覚に”幸運”を発動して、神の一人のオレが与えた”死”を拒絶した。」

しかも、自覚して使いこなせていれば完全に拒絶できただろうに、

無自覚だったから中途半端に拒絶しちゃったんだよ」

拒絶、しきれなかった。

僕が神と渡り合えるのかなんだと突飛な話だが、なるほどそれなら僕が”生きているが死んでない”ということも納得がいく。

しかしまた疑問ができる。

「僕は……これからどうなるんだ」

「アンタが自分で死なない限り、オレに出会って死にかけるまでの時間を、永遠にループしていく」

まあ頑張れや。

エルライトはにたりと笑って、消えた。

午前六時三十分二十一秒。

起床。

「ふああ……」

欠伸のあとに、鳴り響く目覚まし時計を手取る。安っぽいデジタル時計。

左上にチカチカと点滅する、四月一日。嘘の日。

そして僕は、また落胆する。

「まだ……終わらないのか」

これが僕の朝の風景。

これが僕の――

二万八千一回目の、四月一日。

悪魔のような毎日。  
本当に嘘ばかりの日々を、僕は。

(後書き)

この話は、機会があれば連載にしようかなと思っています。もう  
少しキリのいい話に……！

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9109x/>

---

エイプリル・デイズ

2011年10月25日08時10分発行